1　子どもにとって遊びとは (1)

すでに上巻でのべてきたように、子どもの遊びにはいろいろなものがあり、さまざまな遊び方があり、そのなかには得がたい貴重なよきものがふくまれていることがわかってきました。こうした遊びというものは子どもにとっていったいなんなのでしょうか。どのように考えられてきたのでしょうか。

大人にとっての遊びにかんする考察は、カイヨワやホイジンガーなどの意見があります。そうした大人のための遊び論は後でふれるとして子どもの遊びについても、すでに多くの学者によって論議されてきたところです。それを一べつしてみましょう。

まずフレーベルは「遊びとは自分の生活と他の人の生活、内面的生活およびまわりの生活の鏡」と考えました。そして遊びの本質を「表出の自由」に求め、だから映し出されたものは限りなく新鮮な刺激となると述べました。さすがに幼稚園の創始者だけあって、慧眼だと思いますが、生活の反映だけとは限らず、もっといろいろのことが遊びには含まれているはずでしょう。

シラーとかスペンサーは「遊びは、子ども達が成長の過剰な精力のはけ口として、それを消費して

余剰精力説

生活の鏡説

いるのだ」という余剰精力説を提出しました。たしかにエネルギーにあふれた子ははしりまわり、少々クタビレた子は遊ばない——ということもありますが、子どもをよく観察している方なら、あのガキといわれる子が、遊びつかれて、夕食をたべながらねてしまうというほど、余剰も何もなくなるほど、遊びに熱中することを知っておられることでしょうし、余剰エネルギーを費やすために遊ぶのではなく、遊ぶことによって次のエネルギーが増蓄されるということも知っておられることでしょう。

グロースなどは、子どもの遊びというものは、大人の行動や生活のさまざまな形態様式を学習し、将来の生活に適応するように、用意練習する「生活準備」であると説きました。たしかにママゴトや電車ゴッコやお医者ごっこは、そうした側面をもっていますが、普通の大人ならしないトンボとりや虫とり、ジャンケンとびに熱中するのはなぜでしょう。けっして子どもの遊びは大人への生活準備一辺倒ではないということも、すぐにわかるところです。

またホールは、子ども達の遊びというものは、人類祖先が経験

した原始時代の活動を、再現反復しているものだと説きました。たしかに子ども達の幼稚な行動や手先の十分使いきれていない状況は、そうしたことをうかがわせるものではありますが、すでに大脳生理学によって、子ども達の脳細胞は、大人と基本的に異ならず、原始人の脳とは異なっていることがわかった今日では、この説も不十分ということになります。

一方ランゲは、遊びは子どもが生活を拡充充足させるための練習であると考えました。これは前述したグロースの「生活準備説」をさらに拡大補塡したもので、「補充説」とよばれていますが、基本的にいって、前記と同様の欠点を有しているといえましょう。

こうした諸説とは逆に、ラッァルスは子どもの遊びは、訓練とか学習とか、生活準備などによって、心身が緊張をよぎなくさせられている反動としての、精神的解放と休養の場であると考えました。したがって遊びにたいし、一切の束縛や拘束をすべきではないとしたのですが、たしかにときには娯楽や心身の休養といっ

たときもありますが、その多くはひどく身体を動かし、たいへんなエネルギーの消費を行なっているものです。真夏の盛りに汗びっしょりになりながら「かくれんぼ」に興じたり、手足を紫色にかじかませても、雪遊びに熱中するのは、たいへんな心身の負担や緊張を伴っているといえるでしょう。解放はされているが、新たな緊張やスリル、冒険や負担をあえて行なっているのですから、単に「心的休養」で片づけられるものではありません。

アプルトンは、遊びを子どもが身心の発達上、種々な要求欲求を満たすための、生物的活動と考えました。しかし動物による実験と、人間の子の観察との差は、明らかに社会性、特に子ども同士のみならず、大人の生活の影響を無視できないという点で、単純な生物的発達の考え方は批判されるにいたっています。

一方ミッチェルやメーソンは、日常の生活以外に、子どもは自分自身の満足や確認を求めるため、種々な成功の達成を試みたり、支配や占有の要求を満たす活動を行なうのであって、それが遊びだと考えました。こうした考えにたつとき、子ども達にそうした

自己表出説

生物活動説

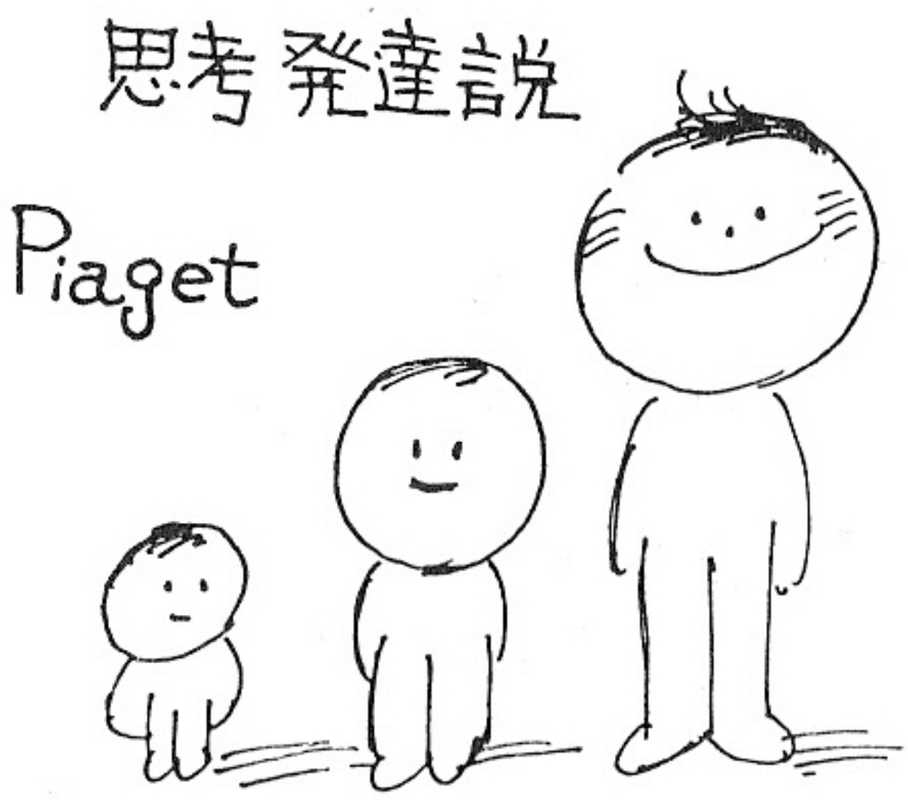
自己表出、自己表現の場を与えることが必要で、それを十分与えないとき、欲求不満となり、歪んだ成長となるというフロイト的発想にもとづいていることがおわかりでしょう。人間の心理の基底に、性意識や社会的禁圧があることを指摘したことは、フロイトの大きな功績ではありますが、すべてをそれによって説明しつくそうというのは無理であり、特に近代社会の経済性や政治的側面、進学問題などには、それ相応の別な法則性があり、それに支配されていることを考慮すべきでしょう。

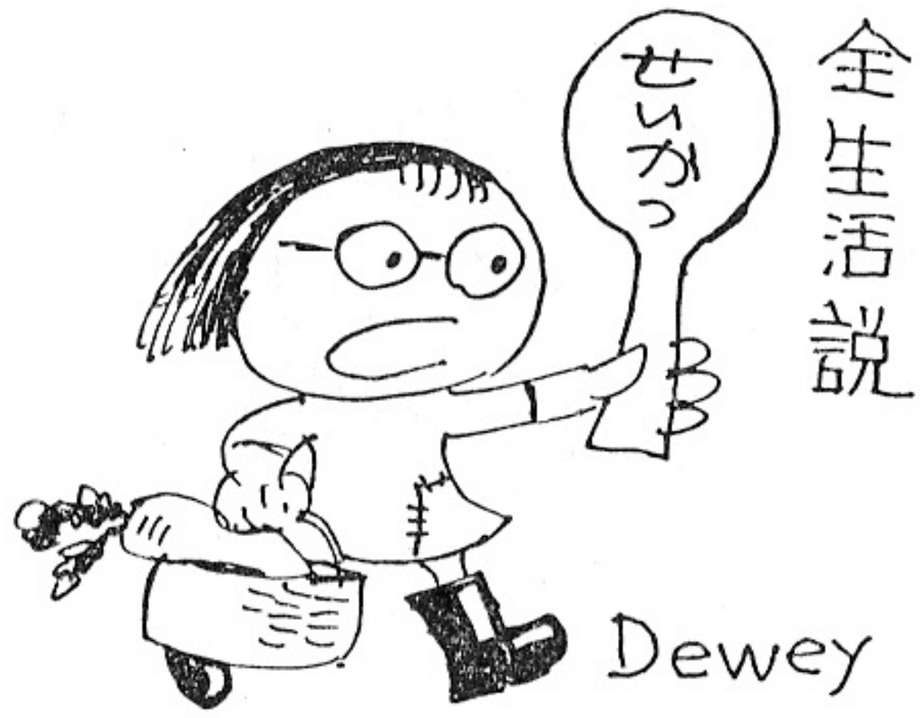
こうしたフロイト流の考え方の一つとして、ゴブロットやシルベラーなどの、抑圧された情緒や欲求を解消させる浄化的な活動、あるいはそうした満足さを他の方法によっていやす代償的行動が子どもの遊びであるとの説があります。その結果、問題児などには遊戯療法といった方法が考案されるにいたりましたが、例えば口唇吸啜接触が満足させられなかった子の、指しゃぶりは、この論で解釈できるとしても、その子が指をしゃぶりしゃぶり、かくれんぼの群のあとについて走りまわっている解釈は、無理という

ものでしょう。問題となっている歪の分析法の一つではあっても、子どもの遊びのすべてをまかなうに足る万能薬ではないことをはっきり考えなくてはなりますまい。

その他、マクドガルの成熟してゆく過程に出現する本能の一つであるとする考え方もあります。たしかに子ども即遊ぶということで、従来本能と思われがちでしたが、最近の日本の子ども達のように、遊べない子、遊ばない子という群が出現するにいたって、遊びが本能なら、それを失うはずはないのですから、この説もいただけなくなってしまいます。

一方実証派のデューイは、遊びは子どもの生活そのものであって、成長に従ってそれは大人においては仕事と遊びに分化するが、それが未分化の状態にあるのだと説明しました。前記したように、大人の生活における仕事（労働）と遊びを対立対峙してとらえる考え方は、仕事は苦しくイヤなもの、遊びはたのしく好ましいものというとらえ方であり、そこからは仕事が楽しくて仕方がない、労働に喜びを感ずるという人間は、異常人か仕事アニマルとしか





考えられないという「資本主義経済下」の限定された考え方となってしまいます。同じように、子どもの遊びを学習と対立させる考え方に遡行してゆき、子どもの生活は当然のことながら、遊びという自由即自律の場と、他の先達者や先験者から教示伝達される習得学習の場があることを無視したものといえるでしょう。

ピアジェは子どもの思考構造の発達に焦点をあて、その機能的／象徴的／規則的段階を経て、子どもは自分の成長を遊びの発達として照応していると説明しました。問題は遊びの発達とか変化は、臨床医学でいえば患者の排泄物の変化か、血圧の変化にすぎません。最も中心なことは、子どもというより人間であり、それが、出生から自立するあいだ、自らの意志と行動によって示す様式のなかに、反映し投影している変化を、発達とか成長とよんでいるということを認識しなくてはならないところでしょう。

さて、こうした学者諸氏の、さまざまな遊びの解釈、定義、説明の、どれが最もよい考えなのでしょうか。最近の学生に、過去の教育学の考え方の話や児童観の変遷を講義すると、そんな古い、

否定され、批判されたものなど、覚える必要も習う暇もない、最も新しくて間違いのない最良の論だけくわしく説明してくれ――と要求されるそうです。なるほどツメコミ教育で、余分なものは一切ご辞退したいということなのでしょう。あるいは読者のなかにも、これまで述べたところをおよみになって、そうしたイラダチをお感じになったかもしれません。ではどの論が一番よい考えなのでしょうか？

2　子どもにとって遊びとは (2)

さて、学者諸氏の遊びにかんする説を一覧してきました。エライ先生方を批判するのが目的ではありませんから、ことこまかに論じませんでしたが、読者は何かぬぐいきれぬ思いにかられたことでしょう。いちばん残念なのは今、日本の子ども達の「遊び」の状況について、ほとんどといって役にたたないというもどかしさです。解釈ではあっても具体的な実践には結びつかず、部分的に納得はできても、十分な満足がえられぬ論であり、そのうえなにが、どうして、こうなったのかがよみとれず、したがって、誰がどうすればよいのかということに歯がゆい思いがするということです。

例えば「遊びと自由」という関係をみてみましょう。子どもは本来自由を求める、その子ども達を